

## 目 次

1. 平成 20 年度 総会議事録
2. 20 周年 会長挨拶
3. 20 周年 会員顕彰式典報告

国税庁認定 特定非営利活動法人

**C.P.I.教育文化交流推進委員会**

# 平成 20 年度総会議事録

原本から、文字サイズ、段落幅を修正掲載する

日時 平成 20 年 6 月 21 日（土曜日）14:20～17:20

場所 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 415 室

1. 議長選出 会長小西菊文を指名
2. 議事録署名人 西川優子氏、中山廣明氏を選出
3. 定足数 定款第 33 条第 4 項に基づく正会員数 840 名、同第 35 条に基づく定足数 210 名に対して、会場出席者 20 名、書面表決出席者 359 名、合計 379 名の出席を以って総会は成立した。
4. 議案書修正 事務局より議案書の字句の修正を行った。
  - 1) 事業報告書 P3 2)-③文中において、⑤→④、⑥→⑤ とする。  
P5 4.の文中 12 行目（取得原価評価：39,992,848 円）と訂正。  
4.国内活動について→ 5. 国内活動について
  - 2) 決算報告書 P1 および P2 （単位：千円）を付記
  - 3) 事業計画書 P2 ②会長が全国を・・・→③会長が全国を  
表中活動費（小計）の備考欄 文字の欠落  
（うち 1,500（千円）を、インドネシア活動特別会計から支出する）  
P6 事業管理費 （単位：千円）を付記

## 5. 議案審議および採決

第一号議案 平成 19 年度事業報告：資料「平成 19 年度事業報告書」  
山川事務局長より、事業報告を行い、質疑応答の後、採決を行った。

【採決】承認票 379 票（うち書面表決 359 票）、否認 0 票で承認された。

第二号議案 平成 19 年度決算報告：資料「平成 19 年度決算報告書」  
加藤会計委員長より決算報告を行った。続いて監査報告を埴監事が行った。  
① 質疑応答：インドネシアの不動産取得に関する資産内容並びに運営、2007 年度の損金処理に係る経緯、現地における教育支援金の使途ほかに関して質疑応答があり、了承された。

【採決】承認 377 票（うち書面表決 358）、白票 2 票、否認 0 票で承認された。  
（16：10 休憩、16：15 再開）

第三号議案 事業計画：資料「平成 20 年度事業計画」

小西会長より、平成 20 年度事業計画の説明がなされた。  
会場より：寄付者の使途指定について、国別特別会計に入れる等、ガイドラインを設定するよう、理事に望みたい。

【採決】承認 378 票（うち書面表決 358）、白票 1 票（うち書面 0）で承認された。

第四号議案 事業予算案：資料「平成 20 年度予算案」  
引き続き、会長が事業予算案を説明し、出席者と会計委員長加藤理事との間で質疑応答が行われ、了承された。  
採決は、第三号議案および第四号議案を一括して行われた。

【採決】承認 378 票（うち書面表決 358）、否認 1 票（うち書面 0）で承認された。

17:20 議長は、議案の審議および採決を完了したことを宣言し、閉会した。  
（2008 年 6 月 26 日付で議長および議事録署名人の署名取得済み）

# C.P.I.教育里親制度20周年をふりかえる

会長 小西 菊文



会員の皆さま、いつも C.P.I.の活動へのご参画を賜り、ありがとうございます。本年は、当会が教育里親制度を開始して 20 周年という記念すべき年となりました。会員の皆さまと共に歩んだこの 20 年を振り返ると感慨深いものがあります。支援をしてきた教育里子は、スリランカで 6,100 名、インドネシアで 4,500 名を超えます。

C.P.I.が、当初からの理念にどれくらい近づいているのかということ、少しお話ししたいと思います。

教育里親制度の成果として、現地の里子たちは、私たちの期待に答えてくれております。学校を卒業し、医師や教師、会社員、あるいは家庭の主婦、母親になり、立派に社会の一員として活躍しております。その人々の中から、昔の自分たちと同じような家庭状況にある子どもたちを守りたい、との意思で、現地での教育里親制度への呼びかけをする動きがでてきました。

C.P.I.が培ってきたシステムを生かした教育里親制度の現地化の第一歩を踏出したということです。

スリランカでは、卒業里子会を結成し、彼の国での教育里親を集める活動を開始しました。自らが夫婦で教育里親になった卒業里子もおります。インドネシアでは、大勢の卒業生が、これまでも現里子たちのよき兄さん姉さんとして相談に乗り、生活や学業の指導に力を注いできました。私は昨年7月以来、地域リーダーおよび卒業生たちと深く話し合い、本年は、インドネシア女性会議および女性起業家協会の指導者たちとの協力関係を深めてまいりました。その結果、来年は、100 名から 200 名の、現地における教育里親が実現します。卒業生たちが、率先して国の貧しい人々を助けにかかり、その結果、教育里親同士として日本人との友情を深めて下さる方々が増えることは C.P.I.の当初からの理念の実現といえましょう。

昨年、平成 19 年に、当会は、「国税庁認定 特定非営利活動法人」(通称 認定 NPO 法人)として、認定を受けることができました。当会の社会的な貢献と組織が、寄付控除対象法人として認められたことであり、これも長年にわたる皆さまのご活躍の賜によるものであります。

このたびは、スリランカ、インドネシア両政府より感謝状が授与されました。

全会員を代表して、20年、あるいは10年に渡る会員として表彰を受けられた皆様に、厚く御礼を申し上げます。そして、おめでとうございました。

記念式典には、全国から 100 名を越す出席を戴きました。

在日大使閣下や来賓の方々のメッセージは、「教育里親制度の尊さ」と「長年にわたり支援してこられた会員さんに対する感謝と賛辞」に溢れていました。

20年という長きにわたって会を継続する間には、大きなハードルをいくつも越えてまいりました。皆様からのご信頼に応えたいと、日々、気持ち新たに行動を重ねた積み重ねが、この20年でした。数多くの失敗にご心配をくださった方々、励ましてくださった皆様、志半ばにして逝かれた方々、お一人おひとり思い浮かべることができます。私は、私が 1988 年に仲間たちとイメージを創り、手探りで始め、そして皆様が育ててくださった C.P.I.の「教育里親制度」を大切に、発展に尽くします。今後とも、従前変わらないご参画、ご協力を、お願い申し上げます。ありがとうございました。

# C.P.I.教育里親制度 20 周年記念式典

開催日：平成 20 年 7 月 20 日

式 場：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)

当日は全国から 100 人を越える里親会員が集りました。  
会場には、スリランカ、インドネシアの駐日大使はじめスリランカ・  
日本教育文化センター(SNECC)、インドネシア・日本教育文化  
センター(PPKIJ)の関係者も列席され、感謝をこめた祝辞を  
いただきました。  
20 周年という節目を迎え、さらなる希望をもって、新たな船出へ  
向けての式典となりました。



開会挨拶する大山実行委員長



会場は全国から参加された会員で一杯になりました。



スリランカ里子代表のサジー  
ワニさんは、スピーチの中で、  
「卒業してからも多くの CPI の里  
親さんにお世話になってきた。  
日本との架け橋になりたい」と  
話しました。



インドネシア里子代表のシギット君。  
「自分は昔、援助を受ける人だった。  
いまは大学生として、後輩を助けること  
ができる。そのことがうれしい、そのよ  
うな私に育ててくれた C.P.I.と教育里親  
さんに感謝している。」  
と語ってくれました。



駐日インドネシア大使(代理)  
より感謝状を受ける埴氏

# “あの子が、こんなに！” 感激の対面、幸せをかみしめた思い出が私を後押し

スリランカ里親代表 藤庭達雄（神奈川）

C. P. I. 教育里親制度20周年の会員顕彰式おめでとうございます。

この20周年という記念すべき日に会員顕彰式へ出席できたことを大変うれしく思います。

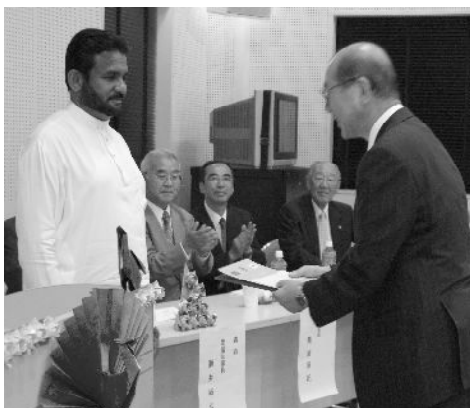
20年という長い歳月の間に、本部役員及び地域会役員の方々の出会いがあり、いろいろな経験をさせて頂き、自分の財産になったと思います。ありがとうございました。

私は平成元年に日本経済新聞に掲載されたC. P. I. の記事を見て入会しました。5年前に妻と一緒にスリランカへ行き最初の教育里子に会うことができました。教育里子になったときに本部から送られてきた写真は、暗い表情の顔の女の子でしたが、会ったときは輝けるばかりのとても美しい女性になっておりました。また両腕には可愛い子どもを抱いており、結婚していて幸せそうでした。

思わず「おじいちゃんですよ～！！」と言って妻共々幸せな一刻を過ごさせていただきました。

教育里子を立派に育ててくれたC. P. I. の会長及び理事並びにスリランカの役員の皆様には深甚なる敬意を表すとともに、会長の奥様をはじめとする職員の方々やボランティアスタッフの皆様、さらに、スリランカで頑張っている現地スタッフの方々に対し、心から感謝申し上げる次第でございます。

C. P. I. のご事業の今後益々のご発展と会員皆様のご健勝を祈念致しまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



駐日スリランカ大使より感謝状を受ける藤庭氏



式典会場風景

## 子どもたちの成長は我がことのように嬉しい

インドネシア里親代表 埴 善光 (千葉)



C.P.I.が教育里親制度を始められて 20 周年を迎えられました事、心よりお慶び申し上げます。併せて7月20日の大安のこの良き日に晴天にも恵まれ、代々木公園のイベント広場で「日本とインドネシア市民協カフェステュバル」が開催されインドネシア駐日大使を初めとし政府関係者、小西会長を初めとした両国の関係者がここに集い盛大に行事が挙行され関係者の一人として慶びに耐えません。このよろこばしい記念事業の一環として永年この事業に協力された会員の表彰が行われ、私を初めとして多くの会員の方々がこの荣誉を授与されておられます。小西会長のご指名でもありますので、僭越ながら里親の代表としてここにご挨拶させて頂く機会を与えて頂きました事を厚く御礼申し上げます。

創業して 20 周年に成るこの記念すべき事業にインドネシア駐日大使代理の教育文化部長エディソンムナフ博士を初めとした政府関係者の方々がご臨席されて、日本とインドネシアの両国の橋渡しの役割を果たしたこの教育里親制度について深いご理解とご支援、ご協力のお言葉を戴きましたことは、この上ない名誉であり感激しております。

それにしましてもこの事業が発足しました当時の小西会長を中心にした関係者の情熱と、地道なご努力と前向き、積極的な行動力に支えられた今日の実績を達成されましたことは、厚い情熱と一途な思いが今日まで持続された結果か結実したものであり、心より敬服いたしております。

聞くところによりますと発足当時の教育支援した里子が今では、インドネシアでは医師、教師、会社員、家庭の主婦等それぞれの分野で活躍されているとの話を伺い、この制度が続いて来たことの社会的な重み、意義を深く感じる思いが致します。

私の場合は、約 18 年程前に小西会長のお話がある新聞に掲載されましたのが目に止まり、関心を持ったのが始まりでした。

インドネシアでは成績も優秀で性格も素直で、人としての資質も素晴らしいのに学資が調達できず上級の学校に進学できずに困っている子供さんが大勢いるので、里親として参加、協力してくださいという内容であったかと記憶しています。

その記事を拝読して、日本の昭和 20 年から 30 年に掛けての終戦直後の、貧しくて厳しかった私どもの当時の生活の状況を思い出し、少しは生活にゆとりが持てるようになったので何か社会的にお役に立てることが有ればと思い軽い気持ちで応募させ

て頂きました。千葉地域会で開催されます様々な行事とか世話役会は家内が中心になってお手伝いさせて頂きましたが、仕事の関係で時間が空いた時にはハイキングにも参加させていただき交流を深めさせて頂きました。

この 18 年を振り返ってみて特に印象深いのはインドネシア言吾を習熟されておられる千葉地域会の岡崎学氏に団長になって頂き、度々インドネシアを訪問し、ご家庭を訪問して里子に面会し、食事をしたり観光をしたり、歌ったりして心が触れ合う嬉しい時間を過ごし、思い出深い機会を与えて頂いた事です。その後、帰国後も手紙などを通して連絡を取り合い消息を確認し合っておりますと、親戚以上の親近感が増してきています。最近の印象ではインドネシアとの距離が一段と近くなって来ているような気がしています。

このように里子がそれぞれの希望、目標に向かって進んでいるのを見ると昔の自分の姿を思い出し、我が事のように嬉しくなってきます。私達の小さな、僅かな支援がだんだん大きく育って大きな成果、輪と成っていくのを感じています。特に本日のこのイベントに参加された方々のお顔を拝見しているとその事を肌で実感いたしており、会員を続けていてよかったとの思いを強くしています。

昨年からは国税庁からは特定非営利活動法人としての認知も受けまして社会的な貢献と組織が公的に認められました。この結果、個人、法人が拠出される支援金につきましては税法面の恩典が認められるようになり、この教育里親制度の事業の基盤が充実されより一層の発展が期待されるようになりました。私としましても昨年からは当会の監事に就任させて頂いております。インドネシアと日本の友好の架け橋としてお役に立てられるように微力ながら側面からお手伝いさせて頂く所存です。何卒今後とも宜しくご指導の程お願いいたします。

## 大きな波を乗り越え、CPIと共に歩んだ 20 年

スリランカ・日本教育文化センター 事務局長  
M. チャンダシリ



SNECC スマンガラ理事長より小西会長に友情の盾が授与された。(右:チャンダシリ事務局長)

スリランカ日本教育文化センターを代表して、C.P.I.の教育里親制度 20 周年を祝うこの大事な機会に参加することができて、とても嬉しく思っております。

SNECC 理事長スマンガラ僧侶は 1987 年に京都で、C.P.I.の創業者・小西菊文氏と初めてお会いしました。そのきっかけで C.P.I.は、1988 年から SNECC と一緒に 20 年間にわたり長い旅をしてきました。そのとき小西会長様はテレビ局の仕事をしていました。C.P.I.活動はだんだん広がっていったため、小西様は、何年間もなさっていた仕事から離れて、C.P.I.教育活動に必死になってくださいました。

小西会長様は私より二つだけ年上ですが、人生で一番大事な若いころを C.P.I.の為に働きました。私も若いころから SNECC の為に頑張りました。昔は私も学校の教師をしていました。SNECC の活動はだんだん忙しくなり、私も退職して一生懸命に SNECC の為に頑張ってきました。

SNECC の発展は、C.P.I.によってできたことです。SNECC は、小西会長様のご紹介によって、鞍馬基金、薄井ランカ教育基金など多くの基金を作ることもできたのです。

大勢の方々のご協力を頂きながら、大勢の学生達に援助することができてとても嬉しく思っております。今日は、このような機会に、私達の喜びを表すことができ、ほんとうに有難うございます。

20 年間の歩みを振り返ってみると、嬉しかったことも沢山ありました。悲しかったこともなかったとは言えません。一人には嬉しいことが、もう一人には悲しく感じる場合もあります。

人間の考えは様々です。同じ考えを持っている人はいません。心身、考え、知識、性格などは様々です。それは文化の違いによって、より複雑になっています。

それだけに、日本、スリランカ、インドネシアのような文化的に大きな違いがある三つの国の多くの方々と協力しあって頑張ってきた、C.P.I.の 20 周年の歩みはとても立派です。

今日は C.P.I.の 20 周年記念だけではなく CPI と SNECC の友好 20 周年記念にもなります。だからこれは私達にとってとても嬉しい機会です。

20年にわたりスリランカの6,500人の学生に奨学金を与えてくださいました、小西会長様をはじめ、C.P.I.の教育里親の皆様、スリランカ日本教育文化センターを代表して心からお礼を申し上げます。そして、最初から小西会長様と一緒にこの活動にご協力してくださっている小西様の奥様、ご両親に、深く感謝致します。

最後になりましたが、お釈迦様のお経を唱えて、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

## 「C.P.I 教育里親制度は若者に勇気を与えています」

インドネシア政府 内務省 社会政策局長 スダルソノ H. 氏



C.P.I.の会員の皆様に感謝します。

今年は、C.P.I.が20年間続けてこられた記念の行事に参加でき、有難うございました。

私は、1988年、まだ東京大学の大学院の学生だったとき PPI(※在日インドネシア留学生協会)会長として C.P.I.の活動に協力し、その後は PPKIJ (※インドネシア日本 教育文化センター)事務局長として、今は C.P.I.と協定をしている内務省の人間として、小西さんと気持ちを合わせています。

教育里親のプログラムのおかげで、インドネシアの4,500人の学生に奨学金が渡されました。

多くの学生が高校や大学を卒業し、医者や技術者になりました民間企業や公務員、学校の教師などいろいろな分野で活躍しています。貧しい人々が力をもつことは国の発展にとって重要なことです。

C.P.I.の教育里親制度は、優秀で学習意欲はあるけれど経済的に恵まれていない学生たちに、高等教育を受ける機会を与えました。そのことは、インドネシアの社会にとって、価値のあることですが、もっと大事なことは、この活動が、心の架け橋をつくる要素をもっていることです。

1990年に、ひとりの日本の方が、私に質問をされました。

「私は、年をとってもこの活動を続けたいと思います。でも、年をとった私と、若い学生さんとの友情はあるのでしょうか？ 友好関係は作れるのですか？」

私は、この質問への答えこそが、教育里親制度というプログラムの価値だと思います。

つまり、C.P.I.の奨学金は、本当にまじめな学生を育てているわけです。

里親さんは、いい社会人になってくれたことを喜ぶことができ、学生は、教育里親さんに感謝する心を持つこととなり、それこそが本当の友好関係といえるのです。

インドネシア政府は、C.P.I.の活動を高く評価しております。

もちろん、インドネシア政府は、義務教育を向上させる計画を進めています。

しかし、貧しいけれど優秀な学生を選んで、教育里親制度によって教育をサポートする C.P.I.のプログラムは、お金の支援以上に、高等教育に進みたい学生たちに勇気を与えるものです。

海を隔てて友情を得よう考え見守ってくださる方がいるという感情は、責任と力の湧く泉なのです。

その結果、日本の皆様に感謝の気持ちを持つようになります。

日本とインドネシアの友好を高めるためにも、このプログラムは素晴らしいものです。

既に教育里親となっておられる皆様が、より多くの方に、この素晴らしいプログラムを話して戴きたいと思います。そして、教育の機会を学生に与えるだけでなく、よい関係をたくさん作っていきましょう。

C.P.I.の教育里親制度の20周年を、政府を代表してお喜び申し上げます。

(スダルソノ氏は急用のため出席できなかったため、メッセージを寄稿して下さいました)